

「喜びに満ちた日々感謝する」

フィリピの信徒への手紙 4 章 4 ～ 7 節

聖学院法人事務局学事部長 岡部 剛

まもなく 2020 年が終わろうとしています。オリンピックイヤーと言われ 1964 年に続く史上 2 回目の東京オリンピックは、新型コロナウイルスによりその希望、期待は来年以降に持ち越されました。西暦 2020 年、皆さんにとってどのような一年でしたでしょうか。

私の所属する教会では 4 月 12 日のイースター礼拝を最後に、日曜礼拝を中止するという決断をしました。緊急事態宣言以後、礼拝を行うことで近隣の方々の不安を煽ってしまう、そのような懸念から土曜に牧師一人、祈りを捧げるために教会へ足を運んでいました。教会に来られなくなった方々は自宅で祈りを捧げる日々を 2 か月余り続け、土曜に牧師が祈りを捧げているという話を聞きつけた人が集まり、今では土曜礼拝として位置付けられました。日曜礼拝が再開、新たな方も迎えると同時に、土曜礼拝の録音を翌日曜礼拝の時間にオンライン配信することで、これまで教会にいらっしやれなかった方々と共に礼拝を捧げる恵みが与えられました。

この 10 か月余りの間どれだけのことが変えられたことでしょうか。学生の皆さんにとって当たり前であった大学での日常が失われたことは非常に大きかったと思います。中には学びに向かう心を失いかけた人もあったかも知れません。しかし一方ではオンライン授業という新たな方法が創出され、現在もその新たな手段を充実すべく、発信、受信者双方に創意工夫がなされていることと思います。失うものがあったても得るものがある。どんなに小さいことでも得たものがあればそれは恵みなのです。イエスの使徒パウロは言います。「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。(中略) 主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。」これまでの当たり前が失われる、本当に苦しいことです。しかし神様は常に私たちに寄り添い、力と知恵と勇気を与えてくださいます。それは理屈ではなく真実なのです。人間には限界があります。苦しみがあります。しかし神様の愛と業には限りがありません。神様は私たちの苦しみを担ってくださり、私たちの思いを超えて実現されます。「思い煩う」こともないのです。どのような状況下でも今を受け入れ、祈り、求め、そして小さなことでも喜びをもって感謝する。「主において常に喜びなさい。」しかし心の弱い私たちはすぐに忘れてしまいます。だからこそ「重ねて言います。喜びなさい。」私たちはそうやって 2020 年もの時を神様の救いの中で過ごしてきました。与えられる新しい一日一日に感謝し、2021 年以降も喜びの中に過ごしてまいりたいと思います。

お祈りします。

ご在天の主なる神様。感謝します。あなたはどのような時にでも、私たちに生きる力、喜びを与えてくださいます。コロナ禍にあって疲れを覚える学生、生徒、その他多くの方々を覚えます。どうか、あなたの救いの御業を示してください。「思い煩うのはやめなさい」。あなたは常に真ん中あり、私たちを救い出してください。変わる事のない限りない愛に感謝し、これから後も喜びをもって過ごすことができるようお守りください。この感謝と願い、尊き主イエス・キリストの御名により御前にお捧げいたします。アーメン。

2020年12月17日 聖学院大学 全学礼拝